
血液透析患者における新規浸透圧性下剤(ラクツロース)内服による便秘症状と QOL に対する効果の検討

医療法人衆和会 長崎腎クリニック

○河野 舞 菅実穂 高木志緒理 植木秀一 白井美千代 河津多代 橋口純一郎 船越 哲

【背景・目的】

透析患者は健常者に比べ便秘の頻度が高く、当院でも 42%の患者が便秘症を訴え、長期間にわたって下剤を服用している。

原因として水分制限や食物繊維の摂取不足、運動量の低下、便秘しやすい薬剤の併用が考えられる。

今回、慢性便秘に対して適応が追加されたラクツロースの効果と QOL の変化を検討する。

【対象・方法】

既存の便秘薬治療で十分な排便が得られていない 20 名にラクツロースを追加し、変更前と、変更後 4 週間の(1) QOL問診表の出雲スケール(2) 便性状スケールのプリストルスケール(3) 治療の満足度のアンケート調査を実施し、前後で比較検討した。

【結果】

浸透圧性下剤(ラクツロース)内服前後で対象患者を分析した結果、出雲スケールによる下腹部症状に有意差があった。プリストルスケールによる便の形状においても、改善がみられた。また、下剤の変更により柔らかい便が出てよかった。腹満感がなくなり食欲がでた。などの意見が聞かれ、便秘の治療効果に満足、やや満足していると回答した透析患者の割合は投与後 1 ヶ月 63%であった。

【考察】

当院で便秘症の訴えがあり、何らかの下剤を使用していた患者において浸透圧性下剤(ラクツロース)使用で便秘症の改善がみられ、それに伴い QOL の向上が期待できると示唆された。